

# あなたの日本語、「やばくない？」

梶原しげるさんが東海学園で講演

日本語検定委員会の審議委員を務めるフリーアナウンサーの梶原しげるさんが6月24日（土）に名古屋市東区の学校法人東海学園東海高等学校・中学校で開かれた第31回サタデープログラム（土曜市民公開講座・全48講座）に招かれ、「やってよかった日本語検定—日本語コミュニケーション」と題して講演を行った。

梶原さんは、日本語検定の問題を随所に織り交ぜながら、本来は否定の意味を含めた「やばい」を若者が逆の意味で使っていることなど、『揺れる』日本語の現状を分かりやすく解説するとともに、日本語本来の意味や言い方を社会人として身に付ける必要があることを訴えた。聴講者は、軽妙な語り口とエピソード満載の講演に、頷いたり笑ったりしながらも、自己点検につながる中身とあって真剣な眼差しで耳を傾けていた。



## ◆なぜ「人々の心に響いた」のか

同プログラムは完全学校5日制で土曜日の授業が無くなったのをきっかけに2002年度にスタート。企画・運営の大半を約100人の中学1年から高校2年生で構成する生徒実行委員会が担い、保護者や一般市民も参加できる公開講座として毎年6月と2月に開催。毎回、約5000人が受講する一大イベントとなっている。

梶原さんはこの日、東京・品川から乗り込んだ新幹線で名古屋に到着。1時間半に及ぶ講演の冒頭、品川駅の売店に並んだ新聞各紙に小林麻央さんの訃報（ふほう）が掲載され、「愛」という言葉が紙面を飾っていたことを紹介。若くしてこの世を去った麻央さんが闘病中にブログに綴った言葉や夫の市川海老蔵さんに最後に残した言葉が、なぜ人々の心に響いたのかを分析した。麻央さんはブログで、好きな人と出会い、2人のこどもに恵まれ、元氣いっぱい生きてきた女性として記憶されたい—などと記した。梶原さんは「語彙（ごい）の選択はその人の人格そのものを表す」としたうえで、「彼女が繰り出してくる言葉の一つ一つが素敵だった」と語り、言葉の豊かさや場面に応じた言葉の選択がいかに大事かを力説した。

さらに梶原さんは、新聞で最近見付けた「壁は白いほど染みが気になる」というある大学教授の言葉を引用。「汚れた壁なら

染みが気にならない」「言葉に接するときには、できれば白い壁でいたい」と自らの言葉に意識を向けるよう呼び掛け、自分の言葉を直そうと思っただけなら日本語検定に挑戦してみてはと提案、概要を紹介した。

## ◆社会人のコミュニケーションとは

日本語検定は（1）敬語、文法、語彙、言葉の意味、漢字、表記の6分野から出題される（2）1級から7級まで分かれ小学生低学年から社会人まで幅広い年齢層が受検できる（3）年2回、過去10年で合計21回実施されている。梶原さんは「日本語の総合力を伸ばすことができる」などと日本語検定のメリットを強調。社会人として日本語の知識や運用力がいかに大事か、裏返せば言葉のコミュニケーションがどれだけ厄介かを物語るエピソードを披露した。

梶原さんは、華やかな仕事にあらがれて放送局に就職した若者が、『電話番』に戸惑い辞めてしまう経緯を、プロの語りを交えて臨場感たっぷり再現し、理由や背景なども解き明かした。画面表示で相手がかかる携帯電話やスマホでのやり取りしか知らない若者にとって、仕事場の固定電話に掛かってくる不特定多数からの電話を上司に取り次ぐことがいかに難しいか。スマホの普及で「誰を立てて、誰を低めて、誰を持ち上げて敬語を使うと世の中が丸く収ま

るかを学習するチャンスを失ってしまった」と梶原さんは述べ、日本語の運用能力を点検する必要があると指摘した。

そのうえで梶原さんは、「社会人として最低限マスターしてほしい」日本語検定3級レベルの問題をパワーポイントの画像を使って紹介した。

### ◆世代で異なるアクセントや解釈

ある大学生のブログの表記が正しいか、友人との会話の言葉遣いが適切かを尋ねる問題では、変換ミスが起こりやすい同音異義語や、使い分けが難しい謙譲語や尊敬語などをめぐって、聴講者とキャッチボールしながら解答を導いた。

世代によって異なる言葉のアクセントや慣用語の解釈など、日本語の変化にも梶原さんは時間を割いた。「やばくない?」「食べたくないですか?」などは、アクセントが無かったり、尻上がりやの音調になることによつて、若者を中心に、本来とは異なる肯定の意味にも使われるようになった。間違つて皿を落として割ったときに「割っちゃった」ではなく「割れちゃった」を使うことが多くなってきたが、自動詞と他動詞で「どちらが良心的か」という疑問が湧いてくる。



梶原さんは、国語世論調査の結果も引用しながら、本来の意味とは異なる認識を持たれている言葉の数々を紹介した。

本来は「貶し(けなし)言葉」の「枯れ木も山の賑わい」という慣用語を尊敬の意を込めた「褒め(ほめ)言葉」と回答したのは7割以上を占めた。「うがった見方」を本来の「物事の本質を捉えた肯定的な見方」と解釈するのは3割以下で、音の響きから受けるイメージが誤解を生んだのか「疑ってかかる歪んだ見方」が



主流だった。

若者は「やばい」を「凄い」と相手絶賛・肯定する言葉として使う。「やばい」は「肯定語」と回答したのは10代で9割以上、20代でも8割近くに達する。梶原さんは、ある女性タレントが『やばい』は良い話にも、悪い話にも使える無難な言葉」とテレビ番組で話していたというエピソードも披露。万能表現とも言える「やばい」を無碍(むげ)に否定するものではないとして、時代に伴う言葉の変化を柔軟に受け入れる姿勢も見せた。

### ◆「家族そろって」チャレンジを

言葉が『揺れ』て変化することを認める梶原さんだが、「伝統的、本来的な言い方はどちらなのか、整理した方がよい」とも語った。「あるそれなりの人の前で話をするときに(社会人として)自分の使っている言葉が適切か否か」を知らないと恥をかくし、自覚が無いと損をすることもあるからで、「不安を覚えたら日本語検定で確認しておく」と便利」として、日本語検定の特長を挙げた。

他の検定と異なり検定時の問題用紙を各自持ち帰ることができ、ホームページや問題集を通じて過去問も公開しているため、「受験級に合わせた準備ができ、勉強のしがいがある」と強調した。

梶原さんは会場を見渡しながら、「家族そろって半分冗談で(日本語検定を)受けてみるのも、出来栄えを話題に食卓を囲むのも、悪くないのでは」と語り、日本語を見詰め直すと同時に、家族のコミュニケーション促進に日本語検定を役立てるといふ『一石二鳥』のアイデアを披露して講演を締めくくった。

(時事通信社編集委員 升谷 昇)